氏　　名	簑原　文子
学 位 の 種 類	修　士（看護学）
学 位 記 番 号	修　士　第　１６５　号
学位授与年月日	平成２５年３月７日
学位論文題目	認知症高齢者に代わり胃瘻造設を決定した家族の心理的変化 －看取り後も続く気持ちのゆらぎについて－

別紙様式３

論　文　内　容　要　旨

※整理番号	170	(ふりがな) 氏　　名	みのはら　ふみこ 簑原　文子
修士論文題目	認知症高齢者に代わり胃瘻造設を決定した家族の心理的変化 ―看取り後も続く気持ちの揺らぎについて―		

研究目的

本研究の目的は、認知症高齢者に代わり胃瘻造設を決定した家族員に含まれる介護者が、胃瘻造設から看取り後まで、どのような心理的変化を辿るのか、またその変化はどのような因子に影響を受けるのかを明らかにすることである。

研究方法

デザインは質的帰納的研究とした。A県下の訪問看護ステーションに依頼し、研究対象者の紹介を受けた。研究対象者７名に対し半構成面接法による面接を行った。得られたデータを逐語録におこし、質的帰納的にデータの分析を行った。

結果

分析の結果、【食べられないことに直面】、【胃瘻造設に関するイメージの具体化】、【生きるための自然な選択】、【試行錯誤しながらの胃瘻介護】、【心身ともに安定した介護生活】、【介護する意義を実感】、【自らの決定に対する心のゆらぎ】、【看取るための準備】、【日々振り返るなかでの心の整理】、【今まで培われてきた関係性】のカテゴリーと、57のサブカテゴリー、153のコードを抽出した。

考察

家族は、摂食・嚥下障害により、患者が【食べられないことに直面】し、胃瘻造設の選択を迫られる。そして、自ら情報を得る中で【胃瘻造設に関するイメージの具体化】を行っていた。胃瘻に対する具体的なイメージを持った家族は、患者が【生きるための自然な選択】として胃瘻造設を代理で意思決定を行っていた。そして、造設後は、実際に胃瘻ケアを行う中で【試行錯誤しながら胃瘻介護】を行っていた。胃瘻造設により、時間的・身体的・精神的な負担が減少し、家族は【心身ともに安定した介護生活】を送っていた。介護生活が安定する中、患者と共に過ごす時間の中で、家族は【介護する意義を実感】していた。そして、介護が長期化する中で、患者や自身の心身の変化を感じ、家族は【自らの決定に対する心のゆらぎ】を感じていた。家族は、患者の近いことを予測し、【看取るための準備】を始めていた。看取り後、家族は【日々振り返る中で心の整理】を行っていた。その心の整理には、【介護する意義を実感】したことや、【自身の決定に対する心のゆらぎ】を感じていたことが影響を及ぼしていた。

また介護生活の全過程を通して、【今まで培われてきた関係性】が大きく影響を与えていた。

総括

胃瘻造設後の家族支援として、介護生活の安定が、介護の意義を実感する時間をもたらし、それが胃瘻選択に対する価値や、介護に対する意味づけ行うにあたり重要であることが示唆された

（備考）１．研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。（1200字程度）
２．※印の欄には記入しないこと。